

平成20年9月25日

草の根技術協力事業 モニタリングシート

※電子データも提出してください。

1. 対象国名・事業名	スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発	
2. 事業実施団体名	特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会	
3. 事業実施期間	平成19年9月1日から平成22年3月31日	
プロジェクト目標	コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。	
成果1 活動1 コーヒー加工工場のオープンセレモニー	活動実績 2008年8月8日にコットマレーのラヴァナゴダ村でコーヒー加工工場のオープンセレモニーが開催された。 ラヴァナゴダの村人は全部で約300人が、この工場完成を大きな喜びで迎えた。 オープンセレモニーは、コットマレー選出の大臣はじめ、多くの人たちによるお祝いの踊りや歌があった。 カウンターパートナーの農業輸出局、デヘミ組合、JICAの西野次長が出席され、お祝いの言葉があった。(写真参照) フェアトレード委員会からスリランカ駐在員も含め8人がこの式典に参加し、日本からアルパ奏者の音楽家も出席し、この式典に花を添えた。	特記事項(計画通りにいかなかった理由・問題点・注目点) 工場 オープンセレモニーの時に、コーヒーの豆を用意して、そこで1次運転をやるように工場オープンセレモニーを計画していた。 しかし、オープンセレモニーでは間に合わなかったため、デモンストレーション運転ではなく、機械の説明のみになった。 日本は1日でできることだが、機械は3相なのに、3相がひかれてなかった電力の問題である。近く解決する。 次は表示の問題である。工場の機械や工程の説明図がなかった。JICAと日本フェアトレード委員会の協力のもとできた工場の説明看板を作るようにしていたが、それもできていなかったため、近くちゃんと完成させるよう指導を行った。
活動2 スリランカカウンターパートナーの招聘	9月10日から9月16日までの1週間カウンターパートナーを日本に3人招待した。日本のコーヒー、農業協同組合、マーケットなど、いろいろ研修を行った。(写真)	

PDM(なければ案件概要票)からプロジェクト目標、成果、活動と転記する。

活動3 コーヒーの苗木を 2 万本 植栽	3 年後の収穫のために、農業輸出局からコットマレー地区に、2 万本の苗木を渡し、村人は7月に植え付け完了。その植え付けは牛糞、鶏糞、草木など全部有機肥料を計画的にした。	
<p>四半期振り返りコメント(団体)</p> <p>この20年度四半期は、</p> <p>① 7月には、2万本の当該地区へのコーヒー苗の植栽、</p> <p>② 8月にはコーヒー加工工場のオープンセレモニーの開催、</p> <p>③ 9月はスリランカから3人のスリランカからカウンターパートナーを招請した。</p> <p>毎月このような行事があったが、この四半期は、我々のプロジェクトとカウンターパートナーとの関係、さらに村人とさらに関係が深まり、地域の人たちやカウンターパートナー、またスリランカ現地駐在員も成長した。次に具体的コメントを記す。</p> <p>① カウンターパートナーは、この地域の農民のため、1ha 当たり、3, 000本、総面積6. 5ha、約2万本のコーヒー苗を準備した。苗を植えてからコーヒーの豆が収穫されるには、3年間必要である。農業輸出局と村人の協力関係が生まれた。</p> <p>この地方は雨が多く、乾燥について常に問題を抱えていたが、コーヒー加工工場ができ、コーヒー乾燥について、改善される見通しがたったことで、さらにコーヒー生産に向けて意欲的になっている。</p> <p><農業輸出局予算 60 万ルピー></p> <p>●農園整地、改良 $6. 5ha \times 20,000/ha = 15万ルピー$ ●コーヒー苗代 $2万本 \times 10ルピー/本 = 20万ルピー$</p> <p>●コーヒー苗植え穴掘り $2万本の穴 \times 10ルピー = 20万ルピー$ ●苗輸送費 $2万本のトラック輸送 = 5万ルピー$</p> <p><コットマレー農家負担></p> <p>● 有機肥料代 15t使用 ● 植栽費用 2万本 労働</p> <p>幾ら農業輸出局がお金を使ってコーヒー苗を提供したとしても、農家が植え付けの労働をしなければコーヒーは育たない。2 万本を 115 世帯で植え付けをした。3年後のコーヒー収穫と生活向上に期待を寄せ、コーヒー植え付けを行った。このこと自体コットマレーにおける農業輸出局とコミュニティの成長の 1 歩だと思う。</p> <p>② コーヒー加工工場の本格的運転は、コーヒーの収穫が始まる11月とする予定である。</p> <p>第2段階のフェーズは、加工工場の運転や管理の課題である。これをコットマレーの組合やカウンターパートナーに教育、訓練をしなければならない。加工工場のオープンセレモニーの様子は、写真を添付する。</p>		

- ③ 9月13日に JICA 九州国際センターで、国際協力隊員 OB、OG 主催の市民へのセミナーで招聘中のスリランカのカウンターパートナーからコットマレーのコーヒー生産地からの報告を行った。80人を超える一般市民の聴講参加者にスリランカの「幻のコーヒー」の現地からの話は、参加者にとっても興味があったようだ。報告を行ったスリランカの3人は自信を持ち、日本での経験をスリランカに帰って自らの地域や国のためにがんばりたいと述べていた。
この招聘は、いろんな意味で有益だった。

この4半期はこのプロジェクトの折り返し点でもあるので、プロジェクトの半ばを振り返り、成果と問題点、これからの見通し、課題などを別途レポートでご報告したい。

在外コメント

国内機関コメント

事業開始してから1年が経過する本四半期は、コーヒー加工工場設立やCP 機関関係者の日本での研修等、インパクトのある活動が重なった四半期であった。

日本における研修事業では、以下の事項を主目的とし農業輸出局行政官等3名のスリランカ人を招聘した。

1. コーヒー焙煎の現状やコーヒー市場・消費者の現状把握のための、工場・市場の視察
2. 農民の組織化や産地直売について学ぶための、農業協同組合等の視察
3. 関係者の理解と支援を得るための事業報告会実施

視察先は、コットマレー地域で参考となるよう、小規模な場所が選択された。一視察先であるコーヒー焙煎工場では、良質の中南米のコーヒー豆と、質が劣るスリランカの豆を見比べることで、目指すべきレベルが具体的にイメージできた。また、包装も重要な要素の一つであり、包装の方法やラベルデザインについても見本を見ながら熱心に質問していた。

また、産地直売・販売事業(加工事業)を行なっている農業協同組合を視察した際は、コットマレーで栽培したコーヒーを用いてコーヒー牛乳を生産・販売し農民の収入向上を目指す等のアイデアが出、将来の展望について協議する姿がみられた。

また、来日中は、熊本県庁、JICA 九州、実施団体関係者や一般市民に対して事業報告を行い、関係者の理解と協力を得るよう努めた。研修員達は事業報告会を通して、本事業が多数の日本人に理解・支援されていることを実感し、今まで以上に本事業の意義や責務を感じていた。

今回の研修を通して、研修員はコーヒー豆を栽培することのみが目標ではなく、その後の加工、販路確保、販売活動等を行い、その結果収入向上に繋がることを最終目標であることを理解した。これは、本研修の成果であり、今後の CP 機関の取り組みに期待したい。



コーヒー加工工場オープニングセレモニー



JICA 九州での事業報告会